第14回国際日本文学研究集会研究発表（1990.11.16）

虫籠をめぐる詩歌史管見

A PERSONAL VIEW OF THE HISTORY OF POEMS ABOUT INSECT CAGES

鈴 木 健 一*

Insect cages appear as an image in Heian literature--the best known example, perhaps, is the story, "Mushi mezuru himegimi" ("The Lady Who Loved Insects") from *Tsutsumi chūnagon monogatari*. During the Edo period, insect cages frequently served as a subject matter for poetry, both popular (haikai, senryū and kyōka) and classical (waka, kanshi). Insect cages were associated with autumn, and added a poetic charm to the season. Poems about insect cages typify the Japanese tendency to appreciate nature within the context of daily life. By feeling sympathy with the insect restrained in the cage, the poet or reader could experience a heightened sense of the sadness of the season.

*SUZUKI Ken-ichi　東京大学助手。東京大学大学院博士課程修了。論文に「近世句題和歌と出版－歌題享受の過程に関して－」「後水尾院歌壇年表稿」などがある。

Ⅰ　はじめに

日本人が古来抱きつづけてきた自然物への愛着とそれに支えられながら形成されてきた美意識は数え上げればきりがないが、そのひとつに秋の虫とその鳴き声の哀切さがある。小泉八雲ことラフカディオ・ハーンの「虫の演奏家」という一文は、それへの深い理解を示す一文である。現代のわれわれにとって鳴く虫の音を聴くという場合、野においてその音に耳を傾ける、野から取ってきた虫を虫籠に入れて室内もしくは家屋の近くでその音を楽しむ、という二つのケースが想像できよう。

一般に文学作品で取り上げられるのは前者である場合が多いのであるが、ここでは後者に関するデータを取り上げながら、そこに見られる様々な問題について考えてみたい。

Ⅱ　虫籠の歴史

日本における虫籠の歴史は古く、たとえば嘉保２年（1095）、嵯峨野で虫を捕え、虫籠に入れて堀川院に奉ったことは諸書に見える。そして虫籠が広く庶民にまで行き渡るようになるのは江戸時代になってからのようである。たとえば『雍州府志』には賀茂社司の婦人が虫籠を作った記事が見え、また『蒹葭堂雑録』にもその図が載る。

その他、虫売りという職業も存在した。このような職業が成り立ったのは日本や中国くらいではないだろうか。さらに虫聴も広く行なわれており、『東都歳事記』には11ヶ所の名所が挙げられている。

また目を海外に転じてみると、虫の声を賞でる習俗は日本以外にも多くの国で見られる。マルタ島では現在でも魚の形をした籠に虫を飼ったりするらしい。そして、とりわけ中国における鳴く虫への愛着は他を圧している。虫籠についても『開元天宝遺事』に既にそれに関する記載があり、その歴史の古さを思い知らされるのである。その他安松京三『昆虫と人生』では現代中国の虫籠を多数紹介している。

Ⅲ　江戸時代以前の文学作品における虫籠

まず江戸時代以前の文学作品において、虫籠がどのように描かれているか、を見てみたい。『応和二年五月四日庚申内裏歌合』『源氏物語』野分『堤中納言物語』虫めづる姫君やいくつかの歌集などに例を見出すことができる。しかし、たとえば和歌などで詞書でのみ虫籠に言及し和歌本文には虫籠との関連が稀薄な例も多い。連歌作法書には虫籠への言及がなされているが、実作では今のところ用例が見出せていない。しかし、『新撰六帖』の光俊の歌からは住み慣れた野原を恋い慕う籠中の虫という主題がみてとれ注目される。そこには束縛された虫とそれに寄せる人間の同情がある。もっとも、この主題も大量に登場するということになると、江戸時代を待たねばならないようだ。

全般に江戸時代以前の文学作品においては、籠中の虫への注目は少ないとみてよいのではないだろうか。

Ⅳ　江戸時代の文学作品における虫籠

江戸時代において、虫籠は秋の風物詩としてすっかり定着している。

虫籠を買ひて裾野に向かひけり(俳)　鬼貫

我あみ戸籠(こ)ぬけの虫をやどしけり(俳)　白雄

枕畔何須金籠貯　恐君好夢被渠驚(漢)　詩仏

とりわけ自然の潤いが少ない都市生活において、彩りを添えてくれるものであった。

そろそろありく盆の上蔦衆　支考

虫籠つる四条の角の河原町(俳)（連句）　惟然

籠ながら売るゝむしや江戸の秋(俳)　都久裳

虫籠は、提げたり釣るされて用いられることもあるが、そのことは虫籠が小さな別世界としての空間を演出するものであることをわれわれにより強く認識させてくれる。

秋の野を手にひつさぐる虫籠哉(俳)　貞徳

虫籠や木かげに掛て声聞ん(俳)　潮堂

有史以来徐々に自然から遠ざかり続けている人間にとって、虫籠による自然空間の演出によってもたらされる心の慰安は貴重なものであり、そういったことへの安堵感やそこから生じる娯楽性は、虫籠の詩歌に関する見過ごしがたい主題のひとつである。

そのことと双璧をなす主題として、虫籠に捕えられることの悲しさ、つらさを詠むということが挙げられよう。

むし籠に無常見せたる夜寒哉(俳)　也有

溥露沾濡顧帯悲(漢)　玩鴎

その悲しさ、つらさは、捕捉された状況のなかで故郷・妻・友らを慕うという心情を虫から汲み取ろうとする擬人化への姿勢によって具体化されることが多い。

故郷としての野原を思う例としては

鳥は雲を汝や野原を鳴く虫籠(俳)　金貞

えられ来て玉の台に鳴むしもあら野の露や猶したふらん(和)

今はとて嵯峨野別るゝ名残にや虫籠の内もねをたてつなり(和)　有功

所せきむしごの虫はえらばれし野べをこひてやよたゞ鳴らん(和)　正根

などがある。そして妻・友を慕う例としては、

籠の虫妻恋しとも鳴ならん(俳)　一茶

こにこむる友をしのびて松虫の野に誘ふとや諸声に鳴く(和)　秋成

などがある。

また、故郷を慕うということに関連して、野にいる虫の音の方が籠中に捕われている虫の音よりもすばらしいという主題も見られる。そこには、都市生活をしている者の自然回帰への志向がみてとれよう。

かごの内にきゝしにも似ずすゞ虫のをのがすむのゝ夕ぐれの声(和)　通村

處せき窓の内なるこにこめて聞くだにあるを野べの虫の音(和)　有功

籠にこめて人はきけどもきりぎりすくさにまがきになくがあはれさ

和　　政貴

それ以外にも、人事に重ね合わせて捕捉された虫の悲しみを描こうとすることもある。

心なき身にもあはれや城跡に生どりにして入る虫かご狂　　半月

＜捕虜の兵士＞

羇絆休言難訴恨　伎能多是誤生涯漢　　玩鴎

＜才能のある人＞

似喚閑人警疎懶漢　　新川

＜なまけ者＞

稽籠鳴秋紡線娘漢　　棕隠

＜遊女＞

ここでは多くの場合、籠中の虫の境遇への同情がこめられていよう。

また、何かを虫籠に見立てる、虫籠を何かに見立てるという例もいくつか拾うことができた。

きりぎりすの籠かちいさき壁下地俳　　良知

かぐらならであら面白や鈴虫籠俳　　正貞

虫籠の舟へさし込む茄子の月川

露にぬるゝ袖の湊になく虫をもろこし船の籠に入ばや狂　　仲良

虫籠に関する詩歌の用例を拾ってみると、虫籠の形状把握については、右の見立てくらいで他には余り描写の対象になっていない。竹で作られた様が美しいとか、船形や家形・三日月形・燈籠形など様々な形があって面白いとか、そういう表現では虫籠は描写されていない。これは日本文学の作品全般に造形美への着目が希薄であることとも関連があろう。虫籠はあくまで、その中の虫に関わる心情的な要素に影響を及ぼす演出装置としての機能を発揮することが求められているのである。

そのほか、虫籠に関連する江戸時代の文学的な事柄として次の二点を指摘しておく。

(a)和歌の歌集においては、江戸後期頃から「撰虫」という題が登場する。橘千蔭の家集『うけらが花』には「虫撰の詞」という歌文が載る。

(b)天明8年に『画本虫撰』という書が刊行されている。喜多川歌麿の画に狂歌が二首ずつ載る。

さて、ここでは江戸時代についてまとめておく。すなわち、鳴く虫の音に秋のさびしさや恋の切なさを読み取ることで得た歳時意識における虫と人間との伝統的な関わりを一方で保持しつつも、捕捉された虫のもたらす小さな自然への安堵感やそこから生じる娯楽性を得ることで、また虫の境遇に同情心を抱くことで、籠中の虫への親近感を獲得した人間は、新たな虫との関係性を築き上げることになったのである。

V　近代における虫籠

近代俳句や短歌のなかからも虫籠に関する作品を拾い出すことができる。そこでは、籠中の虫を、死、老、病といった人生の諸相と重ね合わせてイメージするということがなされている。

飼ひ置きし鈴虫死で庵淋し　正岡子規

鈴虫を飼ひて死にゆくことも見る　古屋秀雄

鈴虫の瓶と孤老と置かれあり　永井東門居

鈴虫や早寝の老に飼はれつつ　後藤夜半

鈴虫を死なして療者嘆くなり　秋元不死男

ここでは、虫たちの小さな生命が、老人や病者にとって生を共にする伴侶であると同時に、死への怖れと諦念を認識させる具となりえていよう。

言い換えれば、近代の作品から江戸同様、籠中の虫への親近感が感じられる

が、それらは人間の死、老、病などへの意識と明確に結びつきながら描かれている。そのため、対象（籠中の虫）を見る側の存在としての人間が、作品内に明確に登場してくるのである。江戸の詩歌の場合、そこまで個我が露出してくることは稀である。ただし、このことを以て江戸から近代への道程を前進とのみ捉えるのは一面的であろう。籠中の虫を表現する際に人間の思いがそこに投影されてはいるが、人間は虫たちの風景の背後にとどまっていることで、一幅の絵画のような詩的世界が保たれており、そのことが受け手の読者の心をより強く動かす場合もある筈である。

Ⅵ　＜生活のなかの自然＞としての虫籠

それでは、虫籠を詠む意味について考えてみたい。籠中の虫は野原に鳴く虫とどのように違うのだろうか。単純に言えば、野原に鳴く虫は最初からそこにあるものであり、それに対して虫籠は家の中もしくは街中に野原のような状況を作ろうとする人間の意志があってはじめて成り立つものといえる。野原に鳴く虫も、態々そこへ出かけて虫の音を聴こうとする場合には人間の意志が介在しているといえなくもないが、虫籠の場合は空間の存在そのものを人間が作り出すという点で人為が介在する部分は多いといえよう。

そこでは、自然そのものを詠むというのではなく、人間生活との関わりのなかで自然も捉えていこうとする視点が備わっているといえる。いわば＜生活のなかの自然＞という、ささやかではあるが人々の生活感情と密着した抒情が形作られているのである。

言い換えれば、＜自然そのもの＞を描くだけでは飽きたらず、＜生活のなかの自然＞を描く行為を表現手段として同時に持ち合わせることが、表現主体の気持ちにより一層そぐうような精神基盤とそれを支える環境の形成をみることができるのである。そのこと自体は、人間がいわゆる文化的な営みをはじめだした有史以来、程度の差こそあれ存在したといえよう。しかし、そのような傾向が特に顕著になったのは、社会的な条件なども考え合わせると、江戸時代な

のではないか。虫籠について考える時、それが江戸時代に至って多数の用例を見出せることと、右のような<生活のなかの自然>に寄せる抒情の形成とが親しい関係にあることを思わずにはいられないのである。

Ⅶ　ジャンルの問題

今回の虫籠の詩歌に関する調査では、俳諧・川柳・狂歌・和歌・漢詩などといった江戸時代の韻文の各ジャンルから用例を拾うことができた。

右のうち、江戸の詩歌といえば代表的なのは俳諧であろうし、その次には川柳・狂歌などを思う人が多いのではないか。それらは江戸時代において盛んに行なわれるようになったジャンルであり、その点で江戸を代表する詩歌といえよう。

それらのいわゆる俗の文芸に対して、和歌・漢詩といった雅の文芸においても、それぞれの枠組みのなかで（或いは新しい枠組を作ろうとの意図のもと）、新しい表現への工夫はさまざまになされている。これらも無視せず、江戸の詩歌という全体的な構図のなかに取り込むことで、より多様でより動的な江戸の詩歌史が捉えられるのではないだろうか。そうすることが豊かで厚みのある詩歌史を記述する上で必要なことであると思われる。

さて虫籠に立ち戻って考えてみた時、右のような問題について何か関連する課題を引き出すことが出来るだろうか。もちろん多様なジャンルの作品から用例を選ぶ方が量的な増加は期待しやすいわけであるが、それ以外に各ジャンルでの特色のようなものは浮かび上がってこないだろうか。たとえば、捕捉された虫の悲しみを詠む場合でも、<野原・虫籠優劣論>はすべて和歌であり、また故郷・妻・友を慕うといった伝統的な意識の枠にとらわれず、人事と重ね合わせようとする傾向は主として漢詩にみられるものである。もし和歌や漢詩の用例が欠落していた場合には、右のような点は見過ごされてしまうであろう。

Ⅷ　中国における虫籠の文学

中国における虫籠の普及度は日本のそれより勝りこそすれ劣ってはいないようだが、では中国における虫籠の詩歌の系譜はどのように辿ることができるだろうか。本稿では主として日本の中における問題を中心に論じたが、中国の問題についても管見の限りを列挙しておきたい。

まず散文では『鶴林玉露』『袁中郎全集』『聊斎志異』『清嘉録』などに用例が見出せた。また詩では銭謙益『初学集』などに例がある。前出『開元天宝遺事』や『袁中郎全集』などは日本の漢詩集の注記などに登場しており、中国の虫籠も何らかの影響を与えたことは十分考えられるが、果たしてそれがどれくらいの程度のものか、についてはなお一層の調査を要しよう。しかし、虫籠の場合は日常生活との関わりから文学的素材として取り上げられたという部分も多いのではないか。

Ⅸ　籠中の鳥との関係

ところで日本では古くから籠中の鳥がよく取り上げられているが、これは明らかに中国からの影響である。かりに平安文学に大きな影響を及ぼした『白氏文集』を繙いてみても、「籠鶯悔出谷」「籠深鶴憔悴」などすぐさま用例を拾うことができる。日本での籠中の鳥の扱われ方も籠中の虫と同じく、故郷である空を慕うこと（『徒然草』121 段、『壬二集』1534番、『風雅集』1849番等）、鳴き声の哀切さ（『新撰六帖』2567番等）などであり、基本的には籠中の虫の詠まれ方と近い。しかし籠中の虫との質的な違いは、籠中の鳥が高雅な趣を醸し出すものであるのに対し、籠中の虫は日本人の日常に接した部分が多い分、生活感情に根ざした詠みぶりとなっていることである。籠中の鳥はあくまで観念的産物の部分が多いのである。

（略称・㊧俳諧　㊥川柳　㊨狂歌　㊩和歌　㊪漢詩）

討議要旨

芳賀徹氏、朴賛基氏、盧翠雲氏、発表者の間で次のような討議が行われた。

芳賀「二年前、中国の北京に数ケ月、ちょうど秋から冬にかけておりましたが、マーケットで、虫屋さんが、たくさん虫を売っていることが印象的でした。竹ひごで作った籠に一ぴき、二ひきを入れ、山と積んで、鳴かして、それを中国の普通の人が買っていく。ちょっと高級なのでは、瓢箪で作った、特にコオロギを入れる壺を売っていまして、それを「壺盧(コロ)」と言ってました。虫を籠に入れて、その声を楽しむという例は、鈴木さんの発表によれば、日本で八世紀の頃からあったようですが、中国ではその頃から、あったのでしょうか。レジュメには、宋の頃の例が引かれてますが。」

鈴木「中国のことについては、それほど調べがいきとどいていないのですが、今、疑問に思っているのは、籠ではなくて、例えば、甕などということはなかったか、それから、中国の人々は、虫籠とかが好きだと思われるのですが、あまり古いところの詩歌に出てこないのは、なぜなのかといった疑問をもっております。」

芳賀「今、私が言いました「壺盧」は、瓢箪で作ったものに細工した蓋をし、それを肌身に入れて腹でかかえたり、脇にかかえたりして、冬中その中にコオロギを入れ、次の年また鳴かせるということをする。日本の、秋になったら虫籠の中でその虫が死んでいく、そこにもののあわれを感じるというのとは違うのですね。韓国では、このような虫籠ということをしますか。」

朴「そういう人工的なことはしません。虫の声を聞くときは、自然で鳴いている虫の声を聞きにいく。」

盧「今、あげられた中国の虫籠についてですが、これは普通キリギリスを入れて売られている籠なんです。その他に壺みたいのがありまして、そこにコオロギを入れて飼う。中国の習慣として、二匹のコオロギを戦わせることがありまして、そのために飼うのであって、声を聞くためではないようです。別の質問ですが、日本では、色々な虫の声が文学の中に登場しますが、この虫の声は、状況の違いによって異なった使われ方をするのか。例えば、ふるさとを思う時は、何の虫、妻や恋人を思う時は何の虫という使い分けがあったのでしょうか。」

鈴木「昔の日本人の虫に対する愛で方ですと、恋の切なさを「まつむし」つまり「人を待つ虫」との掛け言葉で表わす点では、一部特殊性はあると思いますが…」

芳賀「中国においては、虫はペットに近く、日本においては、もっと自然に近いように思われますね。」